

## 第57号

## ● 目次 ●

巻頭言：モンゴルで開催したシンポジウム	1
最近の研究会・シンポジウム等	2-4
東北アジア研究センターシンポジウム 民俗芸能と祭礼からみた地域復興	2
白露歴史研究セミナーの開催	3
江戸時代の漂流民によるシベリア民族学	4
国際シンポジウム第16回特別推進研究「清朝宮廷演劇文化の研究」研究会	4
人事異動	5
新任教員紹介	5
客員教授紹介	6
新任紹介	6-7
著書紹介	7
活動風景	8
編集後記	8

## 巻頭言

## モンゴルで開催したシンポジウム

東北アジア研究センター長

岡 洋樹

昨年9月、モンゴル国の首都ウランバートルでモンゴルの歴史に関する国際シンポジウムを開催した。これは2003年からほぼ隔年で実施してきたもので、今回は5回目となる。東北大学は、モンゴル科学アカデミーと大学間学術交流協定を締結しており、この一連のシンポジウムも、東北アジア研究センターが、アカデミー傘下の歴史研究所や国際研究所と共催してきたものである。2007年に開催した三回目のシンポジウムには、内モンゴル師範大学から研究者が参加したほか、ロシア連邦のブリヤート共和国やカルムイク共和国からも聴講に訪れた。2009年はモンゴル科学アカデミー歴史研究所と内モンゴル師範大学蒙古学学院、昨年の第5回目のシンポジウムは内モンゴル師範大学旅游学院蒙古歴史文化研究所との三者共催となった。日本からは、東北アジア研究センターの共同研究参加者のほか、なるべく大学院博士課程の学生にも参加して発表してもらうようにしている。研究発表はすべてモンゴル語で行われ、報告論文集もモンゴル語で刊行している。



ウランバートルでのシンポジウム

昨年のシンポジウム「清朝とモンゴル人」には、日本の4大学から大学教員2名、博士課程学生4名が参加した。意図したわけではないのだ

が、結果的にその内日本人は私ひとり、あとはすべて内モンゴルの出身者だった。現在日本では、モンゴル史の分野でも多くのモンゴル人研究者や学生が活躍している。いわば国際的なモンゴル研究が、モンゴル国や中国などのモンゴル人によって担われるようになってきている。数年前、ロシアのサンクトペテルブルグにある東洋学研究所の支部を訪問した時、ロシア人の研究者が、ロシアのモンゴル研究はヨーロッパ部では退潮ぎみで、主としてシベリアのブリヤートに研究の中心が移り始めていると言っていた。



昨年10月には、中国北京の人民大学主催の会議に出席した。ここでも中国の真ん中で、発表言語としてモンゴル語が用いられ、モンゴル国から招かれた研究者がモンゴル語で発表を行っていた。北京の首都空港に降り立った私を出迎えてくれた人民大学の学生は、漢族であったが、チベット史をテーマとして、チベット語を学んでいるのだという。モンゴル語を話す漢族学生もいるそうで、中国でもモンゴル研究をめぐる言語環境が変わりはじめているのを感じさせた。このような研究の「現地化」は、ある意味当然のことなのではあるが、それが欧米を含めた国際的な研究交流の中でどのような意味をもつのか、もう一度考えてみなければならぬようにも思われたのである。

最近の研究会・シンポジウム等

# 1 東北アジア研究センターシンポジウム 民俗芸能と祭礼からみた 地域復興

## —東日本大震災にともなう被災した 無形の民俗文化財調査から

2012年度東北アジア研究センターシンポジウムは、東北学院大学、東北大学文学部との共催で、読売新聞社、河北新報社の後援のもと2013年2月23日に片平さくらホールにて開催された。本年度は「民俗芸能と祭礼からみた地域復興—東日本大震災にともなう被災した無形の民俗文化財調査から」というテーマであった。

本シンポジウムは、宮城県からの委託調査事業「東日本大震災に伴う被災した民俗文化財調査」の成果として、祭りや神楽、年中行事などに震災がどう影響したのか、そしてその復興の現在について報告を行うものである。当日の来場者は160名を超え、片平さくらホールは満員となった。これは、本シンポジウムテーマへの社会的関心の高さを表しているといえるだろう。

本シンポジウムは、以下のプログラムで開催された。

### 第1部「無形」文化財の被災とその復興：調査事業の報告

1. 趣旨説明と調査事業報告 高倉浩樹（東北大学）

#### 2. 報告

人類学の立場から 岡田浩樹（神戸大学）

宗教学の立場から 木村敏明（東北大学）

民俗学の立場から 菊地暁（京都大学）

学生の立場から 沼田愛（東北学院大学）

行政の立場から 小谷竜介（宮城県）

### 第2部 無形民俗文化財と地域社会の復興をめぐるパネル討論

司会 政岡伸洋（東北学院大学）

コメント 菊池健策（文化庁） 齋藤三郎（山元町教育委員会）

沼倉雅毅（牡鹿・白山神社担当）

本シンポジウム第1部では、数量化しにくい「被災」という現象、そしてさまざまな地域復興の形があるなかで、被災前との連続性と非連続性を調査・記録することの重要性が指摘された。また、その際には、フィールドワークの専門家を集めた調査が必要であり、いくつか課題は残っているものの、今回のような形の調査は大きな意義をもつことが確認された。さらに、各報告からは、「被災地」といってもその実情は多様であることが指摘された。今後も地域ごとの被災や復興プロセスの実態把握を行うことが必要な



会場の様子

一方で、そうした情報を社会へ如何に還元するのかといったことも問われるであろう。

第2部においては、民俗文化と深く関わっている行政担当、あるいは民俗文化の担い手の方からのコメント・感想を踏まえてディスカッションが行われた。

ディスカッションの内容は多岐に及んだため、ここで全てを紹介することはできないが、この受託調査に参加した一研究者としては、山元町の齋藤課長をはじめ、各市町村の皆様が協力いただいている有難さを改めて感じた。震災後、公務が多忙を極め、なおかつご自身の生活再建にもご苦勞されている中で、調査に協力していただくだけでなく、地域の民俗文化の現状把握や復興に最前線で取り組まれるご苦勞が紹介された。

さらに、牡鹿半島の十八成浜白山神社で笛を担当している沼倉氏によって、見事な笛の音が披露され、会場から盛大な拍手を受けた。沼倉氏は地区の子供たちに笛を教えることも行っている。こうした熱心な担い手がいてこそ民俗文化が存在することを改めて実感した参加者は私だけではないだろう。

なお、当日はさくらホール 2F ホワイエにおいて、調査のプロセスならびに各調査担当地区の様子を写真パネルによって展示した。こちらも多くの来場者の関心を集めた。

当センターでは、本シンポジウムへの参加を希望する大学院生、ポスドク研究者への旅費助成を行った。この助成によって関東、関西から計13名の若手研究者がシンポジウムに参加することができた。こうした若手研究者の参加が実現したことの意義は大きく、本シンポジウムを通して彼らがシンポジウムの発表者や参加者と交流し、新たな知見を得ることができたと確信している。今後ぜひこのような若手研究者への御支援をお願いしたい。（稲澤努）



写真パネル展示



笛を演奏する沼倉氏

## ② 日露歴史研究セミナーの開催

2013年3月23日と24日の二日間、ロシア連邦ノヴォシビルスク市アカデムゴロドクにおいて、日露歴史セミナーを開催した。筆者のほか、上野稔弘准教授、巽由樹子教育研究支援者が東北アジア研究センターから、さらに外部から新井正紀氏、塚田力氏、以上の5名が日本側代表団を構成した。本事業は「20世紀ロシア・中国史再考」プロジェクトユニット、及びその下の共同研究「スターリン、蒋介石と中国新疆」の研究の一環として実施した（公開講演会・シンポジウム企画委員会の費用も活用）。2002年にノヴォシビルスク駐在員を務めていた筆者がセンターとシベリア科学アカデミーシベリア支部ロシア史研究所の共催で同様の歴史セミナーを開催し、論文集『ウラル・シベリアにおけるスターリン政治』をロシア語で刊行したが、今回も同様の趣旨で日本、ロシア、カザフスタンの歴史研究者が一堂に会して、お互いの研究成果を披露した。初日は「アジア・ロシアと隣接地域」と題し、17世紀から20世紀にわたる非常に長期間の歴史事象について十数名が様々なテーマで発表した。発表者と課題は以下の通りである（発表順）。

V.A. ズヴェレフ「アジア・ロシアの諸地域における人口的転換の初期局面：研究の諸問題」、新井正紀「1920-1930年代のウラルにおける国家機関・社会団体の孤児撲滅活動」、I.R. ソコロフスキー「17世紀ロシアのシベリア植民」、巽由樹子「19世紀末-20世紀初頭トムスクにおける絵入り雑誌と公共図書館」、S.V. アルキン「20世紀前半の満洲におけるロシア考古学・人類学学派」、寺山恭輔「1930年代ソ連



セミナー終了後の食事会



セミナー会場と会合の様子

のモンゴル政策」、E.V. コムレヴァ「シベリア商人と通商について」、V.V. イスポフ「20世紀前半シベリア史における人口動態ファクター」、塚田力「ベンテコステ派の新疆移住のプロセス」、T.S. マムシク「エカチェリーナ二世時代のシベリア」、D.A. アナニエフ「18-19世紀ロシアの満洲政策」、V.B. ラベルディン「1946-1947年の西シベリアにおける飢饉」、N.S. コロベイニコヴァ「大祖国戦争期における家族の危機」、S.A. パプコフ「戦後スターリニズムの特徴：1945-1953」。当日は午前10時に開始し、途中の休憩や昼食を挟んで夕方7時までみっちり報告を聞くという充実した一日であった。

二日目は新疆を主題とする共同研究に合わせ「国際政治における新疆問題」をテーマにセミナーを継続した。ノヴォシビルスクに近いアルタイ地方にバルミン氏、ボイコ氏、カザフスタンにオブホフ氏という新疆史に詳しい3人の歴史家がおられたために企画したセミナーである。この3名は初日から活発に議論に参加してくれたし、前日の参加者の多くも二日目の討論に参加した。発表題目は以下の通りである。

V.A. バルミン「1942-1945年の中国北西部におけるアメリカの経済的・軍事的影響力増大に対するソ連の対応」、V.G. オブホフ「1943-1949年のソ連の原子力計画における新疆の鉱物資源採掘問題」、塚田力「新疆における古儀式派教徒」、V.S. ボイコ「新疆の社会政治史（20世紀前半）：史学史と研究資源」、上野稔弘「国民党政府の対新疆政策」、寺山恭輔「1930年代ソ連の対新疆政策と日本ファクター」。

我々日本人グループの送迎、会場やレストランの手配、設営、準備に関してセンター客員教授であったセルゲイ・パプコフ氏を中心に、歴史研究所の関係者の皆さんに大変お世話になった。日本側参加者は1名を除き成田からハバロフスクを経由してノヴォシビルスクに向かったが、復路ではハバロフスクに立ち寄り、かつてセンターに客員教授として滞在されたニーナ・ドゥビーニナ先生と再会して話す機会を持つことができた。グロデコフ名称歴史博物館、ハバロフスク地方図書館、ハバロフスク地方公文書館その他を訪問し、ちょうど中露国境の町であるハバロフスクで将来のプロジェクト研究の方向性についても検討する機会を得ることができた。

(寺山恭輔)

### ③ 江戸時代の漂流民によるシベリア民族学

2013年2月16日、石巻河北ビル1階かほくホールで、市民団体の石巻若宮丸漂流民の会に招待され、「漂流民の記録からみえてくるシベリア民族学：歴史と現在」と題して講演しました。

石巻若宮丸の漂流民津太夫らは日本人として最初に世界一周した人として知られています。1793年に石巻を出た船が遭難し、アリューシャン列島に漂着します。そこで現地の先住民や当時ここを植民地としていたロシア人と遭遇し、カムチャッカ半島からオホーツク・ヤクーツク・イルクーツクをへてペテルブルグまで運ばれます。その後日露交渉史で知られるレザノフの乗る船で大西洋を渡り、1804年に長崎に戻ります。当初15人いた水夫は4人となっていました。

彼らの残した記録は『環海異聞』等に残されています。この書物にはシベリア滞在中に出会ったアリュート人やサハ人（ヤクート）などの民族誌的・地誌的記述が数多く残されています。この点について現在の人類学的視点からどのような資料的価値があるのかについて話しました。

大黒屋光太夫を含めて江戸時代の漂流民によるシベリア



高倉講演会ポスター

滞在のことは知っていました。今回を機会にはじめて津太夫らの漂流記を読み、その資料的な価値に驚きました。特に豊富な民族誌的記述をどうやって彼らは覚えていたのか、記録はどのようにしていたのか、という問題を見いだしました。『環海異聞』は仙台藩の学者大槻玄沢が漂流民から聞き取りをする形で取り纏められたものです。このことを含め漂流民による民族誌情報の文書化の問題は、人類学史の中で検討する必要があると考えています。

この講演会は、私の編著『極寒のシベリアに生きる』（新泉社）を読んで頂いた同会の木村成忠会長が私の研究に関心をもち、同会の副会長にセンター兼務教員の平川新先生がいた縁で、実現に至りました。30人ほどの聞き手の方々は私よりもずっと漂流民のことに詳しい人たちで緊張しましたが、その分質疑応答も盛り上がり、私自身大変楽しい一時となりました。（高倉浩樹）

### ④ 国際シンポジウム第 16 回特別推進研究

## 「清朝宮廷演劇文化の研究」研究会

科研費・特別推進研究「清朝宮廷演劇文化の研究」は開始から5年目となり、最終段階を迎えました。国内での研究会は、3月9日・10日開催の研究会で第16回目となりました。プロジェクトとしては最終回に当たるため、国外から専門家を招聘し、小ぶりながら国際シンポジウムと銘を打って仙台の戦災復興記念館にて実施をしました。3月9日・10日に仙台の戦災復興記念館で研究会を開催したのは、当然のことながら、震災にも負けない本研究、文科系の研究の意気を国内外に示すというねらいがありました。

2年前の震災の4日前、沖縄で琉球王朝の宮廷雅楽を研究する御座楽復元演奏研究会との共同研究会を国内外の研究者を集めて開催し終えて仙台空港に戻りました。それから、わずかな時間の経過で環境が一変し、文字通り桑海を眼にすることになりました。沖縄の方々、別れて間もない我々、そして東北の人々のことを案じていたと、後で知りました。

今回の研究会は、その時の震災を改めて心に刻みつつ、清朝宮廷演劇文化の研究を将来に向けて更に進展させるべく企画し、過去5年間の成果と、目下進行中の研究の報告

も兼ねて2日間の日程で実施しました。発表者は、第1日目は清朝宮廷演劇や檔案研究で第一線で活躍する北京市芸術研究所の丁汝芹先生による講演（司会・金文京・京都大学）を筆頭に、小松謙（京都府立大学）、加藤徹（明治大学）、磯部祐子（富山大学）、中見立夫（東京外国語大学）、第2日目は、杉山清彦（東京大学）、大塚秀高（埼玉大学）、陳仲奇（島根県立大学）、石雷（中国社会科学院、司会・高橋智・慶應義塾大学）、磯部彰（東北大学）の各先生でした。最後に全員参加型の総括「特別推進研究〈清朝宮廷演劇文化の研究〉を振り返って」を行ないました。総括を含めて、シンポジウム概要は当方のホームページ (<http://eapub.cneas.tohoku.ac.jp/court/>) に掲載しています。なお、成果については、科研費・研究成果公開促進費によって、本年12月に勉強出版から論文集が刊行される予定です。（磯部彰）



## 人事異動

4月より地域生態系研究分野に千葉聡教授が、資源環境科学研究分野に高橋一徳助教が新たに着任されました。

また、ロシア・シベリア研究分野では寺山恭輔先生、高倉浩樹先生が教授に、地球化学研究分野では平野直人先生が准教授に、それぞれ昇任されました。

一方、地域計画科学研究分野の大窪和明助教が埼玉大学に転出されました。

(岡洋樹)



●教授  
千葉 聡

2013年4月1日より東北アジア研究センター地域生態系研究分野の教授として着任しました。東京大学地理学教室を卒業後、大学院は地質学教室に進学学位を取得しました。その後、専門を生態学に変えるとともに静岡大学に職を得て、東北大学に異動、現在に至ります。

現在の私の主な専門は生態学ですが、生物進化や遺伝学なども専攻しています。私が最初に行った生態学の研究対象は小笠原諸島の生物で、その生態系の仕組みや進化の研究を行ったほか、行政や企業、住民との協同のもと、小笠原の生態系の保全事業に取り組みました。その後、東アジアの生物相の起源とその保全の問題に関心をもち、特に中国の陸生貝類や昆虫に見られる著しく高い多様性の起源を

探る研究を行いました。最近ではロシア極東地方の生物相の研究を進めており、ロシアの共同研究者とともに、特に湿地や陸水域の生態系の研究を行っています。

センターが他の組織と異なる大きな特徴は、人文系から理系までさまざまな分野の研究者がおられることです。しかしもともと私自身は、人文系と理系が“地域”を研究対象とすることを接点として同居していた地理学教室の出身なので、このような環境は、むしろ何か昔に戻ったような懐かしさを覚えます。今後は、東北アジアという地域を接点とし、ある意味自分の“原点に戻った”研究を進めたいと思います。どうぞよろしくお願い致します。



●助教  
高橋 一徳

2013年4月1日より資源環境科学研究分野に助教として着任しました。電磁波を用いた計測に関する研究をしています。

携帯電話や電子レンジなどで使われている電磁波は、伝播する物質の特性やその分布によって透過や反射・屈折を起こす性質を持っています。その電磁波を地中に向けて送り、その応答を計測し、解析することで地中の構造や埋設物の位置などを知ることができます。このような技術を地中レーダと呼び、地中物理探査の一手法として環境計測や水文学、さらに考古学や土木工学などの分野での応用が進んでいます。

私はこの地中レーダに関する研究を行っています。これまで様々なタイプ・用途のレーダの開発や計測データ解析手

法の開発に関わってきました。最近では地中レーダ計測に関して、その挙動や性能の土壌による影響に関する研究を行っています。地中レーダは地中からの電磁波の反射を計測するため、土壌の電気・磁気的特性さらにその不均質による影響を受けます。したがって、土壌性質がどう地中レーダへ影響を及ぼすのかを知ることが大変重要なことです。また、土壌性質による地中レーダへの影響を明らかにすることで、地中レーダ計測によって土壌特性を知ることができ、土壌やそれをとりまく環境の計測やモニタリングに応用することができます。今後、このような手法の研究を継続していくとともに、環境計測への応用を行い、東北アジア地域における環境問題に対して貢献していきたいと思っています。

客員教授紹介



●教授

ライハンスレン・アルタンザヤ

2013年4月1日、本センター客員教授として、モンゴル国からライハンスレン・アルタンザヤ教授が着任した。アルタンザヤ氏は、歴史学、モンゴル史を専門とし、主として清代(17～20世紀初頭)の外モンゴルにおける仏教会所属のシャビと呼ばれる領民の研究を行ってきた。氏は、1994年モンゴル国立師範大学卒業後、1995年から同大教員となり、同大がモンゴル国立教育大学と改名後、助教、教授を経て現在に至っている。この間2000年6月に博士号を取得した後、同年11月に来日、2003年2月まで東北大学東北アジア研究センターで客員研究員・機関研究員を務めた。帰国後はモンゴル国立教育大学歴史・社会科学部長、同大国際関係マネージャーの要職を歴任している。氏は今年41歳で、モンゴルでは中堅の研究者と言える。1990年代初頭の社会主義体制の崩壊後、社会主義

期の自国史は権威を失う一方、これに代わる新たな研究者養成も困難に直面した。アルタンザヤ教授は、このようなモンゴルにおける歴史研究の空白を埋める新世代の中堅研究者として注目を集めている。氏が勤務するモンゴル国立教育大学は、同国における中等教育の教員養成を使命とするが、一方でモンゴル国立大学とともに、歴史研究者養成の中核機関の一つである。これまで東北アジア研究センターがモンゴルで5回にわたり開催した国際シンポジウムでも、アルタンザヤ教授をはじめとする同大の研究者が研究報告を行ってくれている。今回の滞在では、モンゴルの仏教会に関する歴史的研究を行うとともに、広くモンゴル史に関する日本の研究成果にふれることを目的としている。また教育大学の幹部として、教育面での交流も行う予定である。(岡洋樹)

新任紹介



●教育研究支援者

滝澤 克彦

今年4月に東北アジア研究センター「シベリアにおける人類生態と社会技術の相互作用研究ユニット」の教育研究支援者として着任いたしました。専門は宗教学です。

修士課程までは、福島県の只見町というところで獵師の信仰のことを調べていました。儀礼的な共同狩猟活動が行われるオクヤマという空間の社会的意義とそれを通じた社会関係の動態に焦点を当てて分析しました。

博士課程以降は、モンゴル国でキリスト教の研究をしてきました。モンゴルは仏教徒が多数派の国ですが、実は今キリスト教が増えてきているのです。単純に「なぜ」という問いが出発点だったのですが、調査を進めるうちに、そこに経済や民族主義などの様々な問題が埋め込ま

れていることが明らかになってきました。博論を書いている時点では、いろんな筋書きを模索していましたが、最終的に彼らを結び付けている「救い」というものに注目することになりました。

最近、より広い視野でこのテーマを捉え直そうと「宣教」という問題に焦点を当てています。また、そのなかで「進化論」という問題との出会いがありました。実は、まったく別々の問題に思えるこれらのテーマが、現代社会の宗教を捉える上でとても重要なのではないかと考えるようになってきました。

東北アジア研究センターには、文学研究科の助教時代に3年ほど兼務教員として関わらせて頂いたことがありましたが、この度改めてお世話になることになりました。よろしくお願いたします。



●産学官連携研究員

劉 海

2013年4月に東北アジア研究センター佐藤研究室に産学官連携研究員として着任した劉海(リュウ ハイ)です。私は2009年に中国・同済大学で土木工学の修士課程を修了しましたが、この間2008年10月から半年間、東北大学と同済大学の交換留学制度を利用し、東北大学・佐藤研究室に留学しました。その後、文科省国費留学生として再び佐藤研究室に滞在し2013年3月東北大学環境科学

研究科で博士学位を取得しました。学生としてセンターでは旧暦のお正月(春節)をお祝いする会を2011年、2012年に運営し、また私が作った学生バスケットボールチームは東北大学学内大会で2011年度3位でした。

本センターでは情報通信研究機構(NICT)の委託研究事業「電磁波を用いた建造物非破壊センシング技術の研究開発」を中心にして研究を行います。私の

研究専門は各種レーダーの開発と構造物内部の可視化のための信号処理アルゴリズム開発です。東日本大震災によって多くの建物が損傷を受けました。私達は地中レーダー（GPR）技術を使って、非破壊でこうした構造物の健全度調査を行うことを目標としています。GPRは電波で

地中や建物の内部を可視化します。津波に伴う高台移転の住宅地における遺跡調査などにも応用を考えています。こうした技術が、東北地方の復興に役立つことを祈っています。

(翻訳：佐藤源之)



●産学官連携研究員

コヤマ・  
クリスチャン・  
ナオヒデ

私の専門は地球観測リモートセンシングのための合成開口レーダ（SAR）の解析です。ヨーロッパ宇宙機関（ESA）や、JAXAが今年度打ち上げるALOS-2の共同研究者として衛星リモートセンシングの研究をしています。佐藤研究室に2013年4月産学官連携研究員として参加する前は、ドイツ・ケルン大学で大学院学生そしてポスドクを務め、「土壌・植生・気候システムのパターン」という課題で土壌水分を推定する研究を行っていました。私は2011年カナダ・バンクーバーで開催された国際会議IGRASS2011の「若手研究者昼食会」で偶然会議の委員長を務める佐藤先生の隣に座り、自分の研究内容を話しました。そして、2012年ミュンヘンで開かれたIGRASS2012で再び先生にお会いし、日本で研究を続けたいと強く考えるようになりました。

本センターでは情報通信研究機構（NICT）の委託研究事業「電磁波を用いた建造物非破壊センシング技術の研究開発」に携わりますが、地表設置型合成開口レーダ（GB-SAR）を利用した建物や構造物の遠隔的な健全度調査を行う研究を進める予定です。このような方法は地震や津波被災地の復興のための広域調査に役立つと考えています。またALOS-2に関してはロシア科学アカデミーシベリア支部と校正・検証のための研究を行う予定ですが、同時にドイツ航空宇宙センター（DLR）とも協力しながら土壌水分推定の研究や、日独共同の衛星構想にも参加したいと思っています。今回、東北大学の刺激的な環境で研究できることを嬉しく思い、またセンターの皆さんとも協力していきたいと思っています。

(翻訳：佐藤源之)

 BOOKS 著書紹介

センター関連出版物

東北アジア研究センター報告 第7号

『連携する研究所 国立大学附置研究所・センター長会議第3部会(人文・社会科学系)シンポジウム報告』

佐藤源之・高倉浩樹編 (2013)



2012年12月19日、本センターが世話部局となり、ウェスティンホテル仙台において、国立大学附置研究所・センター長会議第3部会(人文・社会科学系)シンポジウムを開催した。シンポジウムの概要はニューズレター第55号で報告している。このシンポジウムでは本センターで試みている文系、理系の研究者が連携しながら進める研究形態についての議論を深めたく、人文社会系が他分野と共同して実施している研究を紹介することで、分野を超えた研究のありかたについて考える機会とすべく、各分野で文系と連携しながら活躍する研究所所属の研究者に「連携する研究所」というテーマで次の3講演をお願いした。

- (1) 東北大学 加齢医学研究所 杉浦元亮准教授  
非侵襲的脳活動計測で紐解く心の秘密
- (2) 京都大学 東南アジア研究所 河野泰之教授  
地域研究における文理融合—持続型生存基盤研究の創出

- (3) 北海道大学 低温科学研究所 白岩孝行准教授  
環境学の構築に向けた異分野連携  
—環オホーツク海地域における試み—

「東北アジア研究センター報告7号」では本シンポジウムにおける講演内容と、引き続き行われた総合討論を収録し、出版した。

(佐藤源之)

『東北アジア研究』

第17号 2013年2月

●掲載論文

娜荷芽(ナヒヤ)「財団法人蒙民厚生会の教育支援事業—育成学院を事例に」、稲澤努「新たな他者とエスニシティ—広東省汕尾の春節、清明節の事例から」、山田勝芳「工藤忠資料から見た民国初年の白狼軍(白朗軍)」、御手洗大輔「中国失業保障の法的構造とその限界に関する研究」、高倉浩樹「アイスジャム洪水は災害なのか?—レナ川中流域のサハ人社会における河川氷に関する在来知と適応の特質」、北風嵐・伊東洋典・小松隆一「岡山県伊茂岡鉦山産三原鉦とその熱的安定性について」



活動  
風景

## 国際北極研究の新動向 北極科学サミット週間 2013 への参加

東北アジア研究センター副センター長 高倉浩樹 教授



ポーランドの古都クラクフ市旧市街の中央広場

2013年4月13日から19日までポーランド・クラクフ市で北極科学サミット週間 (Arctic Science Summit Week) 2013 が開催された。この行事は、国際北極科学委員会を中心に、関係する北極研究組織によって主催される国際会議である。前半の実務者会議では各国から選出された委員が、それぞれ理事会や作業部会・アクショングループなどの会合を開催し、今後の研究の方向性や組織の事業方針について検討する。後半の科学シンポジウムは、全体セッション・専門分野セッション・学際セッションに分かれ、口頭発表140本、ポスター発表139本という形で構成された。また数回にわたる懇親会・教会でのパイプオルガンコンサート・北極研究関連映像上映・市内見学を含めた様々な関連行事も組み込まれていた。25国から300人以上の参加者があり、研究者というまでもなく、各国の研究機関や研究支援機関・行政部門の実務者なども参加する大変賑やかな会議であった。

2013年3月から私は国際北極科学委員会の社会人間作業部会の日本選出委員を務めることになった関係で、初めてこの会議に参加した。ユーラシア北極・アメリカ北極はいずれも歴史的に人間がくらししてきた場所である。この点で北極地方 (ニュアンスとしては極北・北方に近い) は人文社会科学が伝統的に研究対象としてきた地域なのである。出席した社会人間作業部会のメンバーは21名おり、専門分野は文化人類学、国際法、政治学、科学史、国際関係といった構成だった。会議の議事は、2012年の活動報告、2015年開催予定の第三回北極研究計画会議についての情報提供等が行われた後、作業部会の科学的焦点についての審議、2013年活動の提案と審議という形で行われた。

科学的焦点とは今後重視すべき研究の方向性である。特に印象的だったのは、ヨーロッパ諸国で人文社会科学による北極研究が強化されつつあること、また特に自然開発とエネルギーの問題が重要視されていることだった。従来、



フィンランド・トナカイ牧畜への気候変動影響に関する研究発表会場

文理融合的な北極研究としては気候変動研究がもっとも重視されていたと私自身は理解していたので、大きな変化がうまれつつあると思った。

科学シンポジウムは、毎日午前の早めの時間に、全員が参加できる全

体セッションが開催され、文系理系双方の分野の基調講演が組み込まれ、その後個別のセッションと分かれた。夕方にはポスターセッションが開かれたが、その際には、ビールやワインなども用意されたため参加者は飲み物を堪能しつつ、ポスター発表者との会話を楽しむという趣向だった。

人文社会系にかかわるセッションとして「Impact of Global changes on Arctic societies」、 「Arctic people and resources: Opportunities, challenges and risks」、 「Applying local and traditional knowledge to better understanding of the changing Arctic」、 「Arctic System Science for regional and Global sustainability」、 「Changing North: Predictions and scenarios」があった。

これらに参加しながら私がえた印象は、北極の人文社会科学は大きく2つの主要テーマに収斂されていたことである。主要テーマの第一は、北極のエネルギー安全保障・地政学に関わる政治学・国際関係論である。これは近年の地球温暖化でこの種の課題が着目されることは予想していたが、実際にこれほど多くの研究者が着手しているとは思ってもしなかった。第二に、気候変動を含む社会・自然環境変化に関わる地域社会の対応についての人類学・環境政策的な課題である。これは従来、先住民を中心に行われてきた。北極のエネルギー資源開発がすすむなか、非先住民もふくめた北極圏の地域社会全体に対して人類学的フィールドワークを踏まえたアプローチが出現しつつあることも強い印象になって残った。新しい北極研究がより広い意味で人文社会科学に進められていることを実感した。

会場となったポーランドの古都クラクフの旧市街は城塞都市である。駅近くには赤レンガ造りのバルバカン砦があり、ここに設置されているフロリアンスカ門を通ると、世界遺産にも登録されている町並みが広がる。第二次世界大戦で空襲を受けなかったという町並みは、高い尖塔の教会や古くからの建造物、そして中央広場によって構成されている他、観光客用に装飾された馬車の足音が石畳に響いてくる極めて印象的な空間だった。会場となったヤゲロニア大学 (Jagiellonian) は、それぞれの学部や施設の建物が町中に分散していたこともあり、この旧市街を堪能しながらの旅となった。

編  
集  
後  
記

2013年度最初のニューズレターをお届けします。今号より誌面がオールカラーとなりました。出来栄はいかがでしょうか。カラー写真の提供にご協力くださった執筆者の皆様へ感謝申し上げます。新任の方々を迎え、新たなスタートとなりましたが、依然としてセンターメンバーの分散状態は続いています。昨年着任した私は、川北合同研究棟よりも一時移転先の経済学部棟にいる期間の方が長くなりました。落ち着いて過ごせる環境に戻るまでもう少しでしょうか。  
(高橋陽一)

東北大学 東北アジア研究センター ニューズレター 第 57 号 2013年6月27日発行

発行 東北大学東北アジア研究センター 編集 東北アジア研究センター広報情報委員会

〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内41番地 東北大学東北アジア研究センター

PHONE 022-795-6009 FAX 022-795-6010 <http://www.cneas.tohoku.ac.jp/>



植物油インキを使用し、環境にやさしい水なし印刷方式を採用しています。